

48 題名が誤っていると考えられるルネサンス2作品

2023

真鍋友範

通常我々は過去の美術史家が命名した題名を疑うことはしない。しかるべき経緯があり、現在まで引き継がれているものとするからだ。

私はルネサンス絵画、バロック絵画のアマチュア研究者を自認しているが、私にはどうしても納得し難い題名のルネサンス絵画作品が2点ある。

一点はジョルジョーネの《人生の三世代》、もう一点はジョルジョーネの弟子であった時代の画家ビオンボが描いた《三人の哲学者》だ。

1 奇妙な題名《人生の三世代》 ジョルジョーネ



《人生の三世代》 ジョルジョーネ
パラティーナ美術館 ピッティ宮 フィレンツェ

この作品は、どうして《人生の三世代》なのか。私には全く理解できない。
この作品にこの題名を与えた美術史の専門家は誰なのか。



【イエスの導くごとく、我也導かん】・【レオ10世肖像画】

*左から、レオ10世、イエスの弟子、イエス

この【時間を超越した画面構成に見られる大胆な構図】について、これこそ【ジョルジョーネの残した偉大な功績】であったことを忘れてはならないだろう。

2 奇妙な題名《三人の哲学者》



《三人の哲学者》 セバスティアノー・デル・ピオンボ
ウイーン美術史美術館

この題名は《三人の哲学者》だ。しかし、三人に哲学者らしさは全く無い。

まず、腰掛けた若者は、手に直定規と、コンパス（ディバイダー）を持っている。学者ではなく、【船大工、または造船設計者】であろう。ターバン姿の男は、上品な衣装と威厳ある態度から、地中海での東方貿易に携わる【船主】だ。ヒゲの男は、手に書類を持つが、これには天文学の図版が見える。また、その手にはディバイダーを持っている。つまり、航海に必要な天文学図と、海図上の距離を測るディバイダーを持っているから、【船乗り、航海士または船長】だ。

従って、【三人は哲学者では無い。】

しかも、重要なのは、【若者と船主は、数十年の年月を隔てた同一人物である】ことだ。根拠は、共通するホワイトの色彩と、二人の顔色の違いだ。若者は、数十年前の船大工（造船設計家）に憧れた若き船主の姿であり、中央の船主は、顔色を暗く表現し、既に亡くなった人物だ。

この追悼画に描かれたストーリーは、『若い頃造船設計家に憧れた若者は、やがて家業をつぎ、立派な船主となったが、難破あるいはイスラム商人たちとの海上での争いにより、友人の船乗りとともに亡くなった。』この人物（船主）を追悼する目的で、ヴェネチア貴族がジョルジョーネ工房に注文したが、実際に製作に従事したのは、当時の弟子であった画家セバスティアーノ・デル・ビオンボであったのだ。

当然、ビオンボは、師匠ジョルジョーネの指導下であり、【ジョルジョーネの追悼画形式】*で描いている。



【船主であった親族への追悼】

* 左から、若い頃の船主、船主、船主の友人

- * ジョルジョーネの描いた追悼画に分類されるもの：《嵐》、《田園の合奏》、《羊飼いの礼拝》では、亡き人物を田園風景に配置している。
- * 亡き人物である追悼対象者は、上記全て【暗い顔色】で表現されている。
- * 若者の白いシャツ、白いハンカチと、船主の白いターバン、白い腰紐が、意図された共通配色であり、同一人物を示唆している。
- * 船主は異なる時期の同一人物 船長は船主の友人であり、船主と同じく、暗い顔色であることから、同時に亡くなった人物と推定される。これは《田園の合奏》でも見られる表現

この作品が、難解な作品である理由は、三つ指摘できる。

- 1) 注文した貴族個人の家族史の記録であり、宗教や歴史などの題材では無い為、外部の人には難解であること。
- 2) 【ジョルジョーネ独自の追悼画形式】である為、田園風景のもつ【天上界を示唆する表現】が一般的に理解できないこと。
- 3) ジョルジョーネ独自の時間差場面の合成表現が、ビオンボ作品に引き継がれていること。つまり、同一人物（若者と船主）が時間差で同時に描かれていること。*この説の証拠となる絵画は、《聖ウルスラの死と埋葬》カルパッチョ・アカデミア美術館だ。聖ウルスラの死の場面と、埋葬の場面が、同じ画面に合成表現されている。

【船主の名前】は、現段階（2023）では不明である。依頼したヴェネチア貴族ヴェンドラミンの家系図が残っていれば、もしかして、将来に於いて、追悼対象の人物名が判明するのだろうか。

今考えられる最適な題名は、《船主であった親族への追悼》だ。